

第39回 名古屋芸術大学卒業制作展

2012年2月21日[火]— 2月26日[日]
愛知県美術館ギャラリー[愛知芸術文化センター8階]
10:00~18:00(金曜日は20:00、最終日は17:00まで)
[美術学部 美術学科(日本画・洋画・美術文化) デザイン学部 デザイン学科
大学院デザイン研究科]

名古屋市民ギャラリー矢田
9:30~19:00(最終日は17:00まで)
[美術学部 美術学科(彫塑・立体造形・ガラス・陶芸・アートクリエイター・版画)
デザイン学部 デザイン学科]

名古屋芸術大学 西キャンパス[アート&デザインセンター]
10:00~18:00(最終日は17:00まで)
[美術学部 美術学科(洋画) デザイン学部 デザイン学科]

映像作品上映会[愛知芸術文化センター12階 アートスペースD]
2月25日[土]14:00~20:00
2月26日[日]10:00~17:00

第16回 名古屋芸術大学大学院修了制作展

2012年2月28日[火]— 3月4日[日]
名古屋市民ギャラリー矢田
9:30~19:00(最終日は17:00まで)
[美術研究科・デザイン研究科]



卒業制作展記念講演会
特別対談
絹谷幸二×仲居宏二
「アート」の匙加減

2012年2月25日[土]14:00~16:00
愛知芸術文化センター12階アートスペースA

※申し込みは終了しました。

Open 12:15~18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

入場無料 どなたでもご覧いただけます。

- 2/21 四 → 2/26 日 第39回名古屋芸術大学卒業制作展
3/23 金 → 4/11 日 デザイン学部レヴュー選抜展
4/13 金 → 4/18 日 梶田君代展
5/11 金 → 5/23 日 2012年度企画展
Bite-Size 日英テキスタイルアート交流展
5/25 金 → 5/30 日 peace nine展
「版画コース・コレクション」展
5/25 金 → 6/6 日 NEW IDEAS IN MEDALLIC SCULPTURE at NUA

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 TEL[0568]24-0325 FAX[0568]24-2897

Ble Vol.33
発行日 2012年2月17日
編集 高橋綾子(美術学部美術文化コース)/猪狩香織(アート&デザインセンター)
発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 E-mail adc@nuac.ac.jp URL http://www.nuac.ac.jp
2012 Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts デザイン/印刷 サンメッセ株式会社



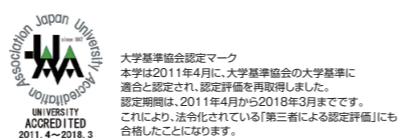
編集後記

昨年春より当センタースタッフとして日々学生と接する中で、密かな楽しみとしているのが名芸生のファッション。それらは気候や用途に合わせるだけでなく表現手段の一つとして等身大の彼らを写し出しています。季節はめぐって本格的な春もすぐそこ。巣立っていく卒業生や期待に胸を膨らませた新入生も、新たな環境で自分の持ち味を上手に活かしたファッションを楽しんでほしいものです。

猪狩香織 アート&デザインセンター



最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄大山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重-名古屋芸術大学西へ約1,000m徒歩15分
※急行一歩急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄大山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分



大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

「私」の My Fashion

ファッション



服をつくるということのなにか、

ミシン、ガスアイロン、人台、どこからでもウール地の匂いが立上る仕事場、父はテーラーの人生を最後の日まで生きた。母は2階で和裁仕立、裁ち板のまわりには織り、染めの絹や綿の反物が積み上がる。糸と針を生業とする家で育った私は生地全般について体で覚えたことになる。30年ほど前の父の死以前はもっぱらスーツを着込んで仕事をしていたのはこんな事情だ。

父製のテーラーメイド(注文紳士服)の在庫を着尽くしてから、いつしか服を自分でつくるようになった。この頃、海外に出る事が増えたことも影響して、和洋とりまぜでの旅服づくりとなる。寒暖、湿気、内と外、公私への素早い対応を余儀なくされる。よく作るのが日本の労働着系、作務衣などをベースに直線縫いのコート、アジアのゆったりパンツ・サルーン系のボトムである。ミシンワークは直線縫い、細部は手縫いで仕上げる。素材はキモノの絹・麻・綿などの古布、刺し子を使った労働着、刺繍や染めのアジアの布地、慣れ親しんだウール生地、時に役目を終えたシャツ、コタツ掛け、カーテン、浴衣地など何でも使う。

旅と服、伝統系ではインドのサリー、そしてプリーツ プリーズを始めとする ISSEY MIYAKE INC. の服、どちらも素材・まとい方の美しさ、着やすさ、かつ量めば薄い。素材と着方次第で最高の旅服であり日常着でもあると勝手に思う。

今の日本の若者服を見てみよう。ファッション用語で言えば、アジアスタイルの

自然派、ダブルコートのようなトラッドの機能系、インナールック、世界の民族系伝統文様やフリース服、といったレディメイド(既製服)をタイトに、レイアードに、リメイクに、時に古着風に、あるいはレースやファー、ビーズなどのエレメント使いなど、楽しんで着ている。セレクトショップも、自分達のテースト形成には強い味方だろう。しかし、この我儘を許しているのは、モードを長くリードしてきた高級注文服の歴史、つまりオートクチュールそしてプレタポルテ(高級既製服)へ、プロデザイナーの自立とブランド、量産化からトレンドづくり、のみならず、靴、アクセサリ、化粧品メーカーなど一大産業を築くファッション界の基本自由な精神の後押しがあったからだと考えて欲しい。

服は必要から生まれる。必要の内容が異なるだけである。私の服、上から下までハンドメイド(手づくり)を基本としている。手間をかけて作られた布地を探し、手間、暇をかけてのんびりと自分の体型に合わせて服をつくる。同じ感覚で一本の糸を布地に変えるニットもよく作る。もちろん私が買いたい服もある。いわゆる定番類、T・ポロなどのシャツやソックス、特殊ミシン・編み機でしか作れない服など、また新素材系、ポリエステル服やアウトドア系の機能服である。こんな服生活を可能にしているのが日本の繊維メーカー、縫製技術産業の先進性にあることを忘れてはならない。

須田照子 デザイン学部教授

